

統一

第百八十五號

明治三十一年二月十四日第三編 郵政省 (每月一回)

(東京 三益印刷株式會社印刷)

目次

信念成佛

- 一、慈愛の聖訓
- 四、甘露の涙
- 七、亡ひぬ悦
- 十、眞の佛と眞の我
- 十三、釋迦牟尼佛
- 十六、妙法と吾人
- 十九、成佛の味
- 二、感歎の眞心
- 五、元政の追憶
- 八、眞の我
- 十一、信仰の動機
- 十四、善量品と眞の佛
- 十七、佛の五果
- 二十、信仰と生活

大僧正 本多日生

- 三、無聲の悲
- 六、心と心の響
- 九、至誠と信仰
- 十二、信仰の徳
- 十五、慈悲の源
- 十八、佛性の光

社會學上より見たる佛法

延山旅行中に於ける予の所感 (續)

法華經講演集 (自五〇頁至六二頁)

報道廣告等

法學博士 有賀長雄

城山生

本多日生

信念成佛

(六月十六日妙教上人會に於ける講演吉田榮晴筆記)

本多日生

一、慈愛の聖訓

現在の困難を思ひ續くるにも涙、未來の成佛を思ひて喜にも涙せきあへず、鳥と蟲とはなけども涙をちす、日蓮はなかねども涙ひまなし、此の涙世間の事には非ず、但偏に法華經の故なり、若し爾らば甘露の涙とも云つべし、涅槃經には父母兄弟妻子眷屬に別れて流す處の涙、四大海の水よりも多しといへども、佛法の爲には一涙をもとばさずと見えたり。(證法實相抄)

二、感歎の眞心

今日は生憎雨天でありまして、諸姉の御參詣はどうかと思つて居ましたが、斯くの如く多数に出席せられましたことは、深く感ずる次第であります、よく昔の説教家が、雨天にも拘はらず仰せ合はれまして御參詣

の程、御奇特千萬に存じまするといひましたが、若し之が形式丈で申たならば、何の價値も無いものであります、諸姉は尊い佛様の御本懐を聴きたいといふ、極めて崇高なる麗はしき信念に驅られて、此處に集られたのでありますれば、只今私は誠心から深き感歎の情が起つたのであります、是を世間から見ますれば、芝居見物とか、落語或は義太夫を聞きに行く様な、面白もなければ趣味もない、又一面から考へますれば各人は家庭を持つて居らるゝので、日本の家庭は毎日用事がある、その日常の用事を處理して置いて、參詣の時間を生み出して來られたのである、殊に婦人は一寸外に出るにも、衣服を着かへるとか化粧するとか、家事の都合を繰合はすとか、中々容易なことでない、それにも拘はらず、御佛を渴仰して參詣せられたことは、これ程尊いことは八世にあるまいと思ふのであります、嘗て日蓮上人御在世中、佐渡に御流罪の當時、上人を慕ふて佐渡まで御訪ねしたり、身延御隱栖後に身延山に上人を尋ねられた信男女に對しましては、日

達上人は誠意をこめて感歎せられて居る事が、御書に見えて居りますが、私も亦今日は此處に參詣せられた妙教婦人會員に對しまして、感歎を禁じ得ない實感を起したのであります、この誠意より出づる感謝を以て諸婦も満足をして頂きたいのであります。

三、無聲の悲

此の真心を以て感ずることは、實に尊いことでありまして、只高尚な學問や理屈を學んで、それを其儘説いたところで、餘まり價値のあるものではありませぬが、此の人と人が真心を以て感じ合ふ事、即ち心と心と感ずるといふ所に、無上の價値があると思ふのであります、先程拜讀致しました上人の御文章も、其側から眺めましたので、鳥と蟲とはなけれども涙をちらすとありますが、彼の鳥畜類は感じてなくのではありません、只器械的に鳴くのであるから、何程鳴いても涙はない然るに今日達は聲を出してはなかないが、涙ひまなしと仰せられたのは、常に真心は慈愛に満ちて居られたからである、此の無聲の涙は日本人獨特の美風である

と思ふ、支那人や朝鮮人も随分泣くは泣くさうですがそれが形式的の場合が多いのである、西洋人も亦聲を發して泣くことが多いと云ふことであります、日本人は聲を出さないで泣く、其處に言ふに言はれぬ痛切な感があるのです、此の點から申しましても、日蓮上人は日本人の性格を代表せる偉人であります。

四、甘露の涙

上人は佐渡に御出になつても常に泣き給ふた、併しそれは何で泣かれたか、罪無くして配所の月を見るのが悲しくて泣かれたのか、戀しい人と離れたのがつらいので泣かれたのか、それとも飢寒に堪へられずして泣かれたのか、決してさうではない、此の涙世間の事にはあらず、但偏に法華經の故なり」と仰せになつてゐる、法華經の意義は廣大である深遠でありまして、此の經の弘まらざる限りは、眞に人を救済する事は出来ぬと考へられたからである、近來救済といふ文字は頻りに用ゐられますが、其意味は非常に廣いので、一夜の宿を貸すも救済、一椀の飯を施すも救済、金錢を

施與するのも救済には相違ないが、宗教でいふ救済はこの一面に止まらない、更に深き意味があるので、人生を根本的に永久に救済するのである、此の意味を完全に説かれたものは、法華經を除いて他に無いとの信念に立ち給へる上人である、故に法華經が無つたならば、未法今時の吾人衆生を根本的に永久に救済するとは出来ない、上人は此の救の道を含める唯一無二の教法を弘め給はんとして、血涙をそゝがれたのであります、故に上人は甘露の涙と仰せられた、此の甘露といふのは何ともいへぬ妙味があるので、それを一滴飲むと身心共に爽快になり、喜悅に満たさるので、其効能は到底筆舌を以て述ぶることは出来ないものであります、故に法華經の功德の廣大なることを最勝甘露門といひ、或は甘露を以てそゝがるゝが如しとも申されである、畢竟法華經は甘露と同一の効能があり、功德があるからであります。

五、元政の追懷

上人の此の甘露の涙は深き感動を永遠に與へ、六百

有餘年の今日、尙吾人にそゝがれつゝあるので、嘗て深草の元政上人といふ方が、母を連れられて身延山に參詣せられ、御眞骨堂を拜せられたことがある、其時に「何故にくださし骨のなごりぞと、思へば袖に玉ぞちりける」と詠せられたが、上人の御一代は流罪死罪を始め、其他幾多の艱難に遭遇せられたのは、そもそも何の爲であつたかと考ふれば、知らず知らず涙がこぼるゝと讀まれたので、佐渡に於ては塚原の三味堂、それも一間四面の辻堂に、蓑を着て雪を食として御座しましたのである、各宗の祖師の美德には、多く後から附會した事があるが、日蓮上人のは後人の附け加へたのでない、傳記の重大な事は悉く實際であらせられた、それが半年や一年でなく、前後四箇年といふ長年月の間を過させられたのでありまして、彼れや此れやと思ひ出でられた元政上人は、思へば袖に玉ぞちりける、と真心から深く感動せられたのである。

六、心と心の響

勿論斯ういふ事は元政上人に限らず、人は誰しも道

徳的威應といふものを有して居る、彼の菅原の剣に、松王が主君の爲に一子小太郎を寺子入させて、管秀才の身代りとし、自己が首實験の役であるにも拘はらず其場に臨んで之が管秀才の首に相逢御座らぬと、受取る所を見ては、何人と雖も落涙しないものはありますまい、又楠正成が櫻井の驛で正行を呼びよせて、父は討死すとも汝は家に歸り、一族のもの縦令一人でも生き残りてあらん限り扶持し置いて、再び義兵を擧げ君の御代となし奉れと、客物を渡す所を見ては、どんな拙ない俳優がやつても涙がこぼるゝのである、是れ畢竟人には始から心と心と相感する性質があるからで、古くは釋尊の話を聞いても、日蓮上人の歴史を聞いても、一切衆生の爲に、斯くも艱難をせられたのである大慈大悲の血涙に充たされて居られたことを知つたらば、何人と雖も真心から感謝の念を起すでありませう、此の真心といふのが眞に尊いので、通常の人には勿論の事、悪人強盗と雖も必ず起り得るのである、彼の孟子に惻隱の心は仁の端なりとありまして、赤子が

と云ふに、法華經の信念に依つてのみ得らるゝので、縦令巨萬の富を獲つとも購ふことの出来ない、尊い所のものであります。

八、眞の我

人々は皆平等に此の尊いところのものを有つて居るので、決して身分の高下貴賤や貧富に關はるものではない、只それを磨いて赫々たる光を放たしむるものと、之を捨て、顧ないものとの、二に別れるのであります。嘗て孟子が魯の哀公に遇はれた時、哀公のいはれるには、世の中には随分と面白い人間もあつたもので、先日私の臣下に宿がへをして、諸道具何一つ残さず運んだが、肝心な女房を忘れて行つたものがあると、驚いた顔をして話された、處が孟子が驚くかと思ひの外、何女房を忘るゝ位でない、我が身を忘るゝものすらあります、彼の桀紂の君の如き即ち是れであると言はれたが、實に桀紂の君は我が身を忘れた結果、民をも齒を祖先の徳をも傷け我身も亡びたのである、是は誠に心を留むべき話で、宗祖の御書の中に引かれてある

將に井に陥らんとするのを見ては、縦令強盜をする様なものでも、必らず之を助ける、人は狂者でない限り皆真心を有つてゐるからである。

七、滅びぬ悦

今世を佛敎で申すすと信念成佛といふので、無宗敎の人達は、信念成佛は専ら死後の事に屬する様に考へてゐるが、之は大なる誤解でありまして、此の生きてゐる現在で信念成佛の妙味を味ふのであります、之が最も尊いことでもあり、又最上の快樂でもあるので、言葉を変えて申すすれば、人の此世に生れて來た一番の幸福は何んであるか、美酒佳肴がよいか、財寶がよいか、名譽がよいかと申しますに、是等は一時の喜びに過ぎない、永久に喜ぶに足るものでない、如何なる美味と雖も飽食すれば厭やになり、財寶も名譽も亦永遠に満足と與ふるものでない、悉く一時的の喜、一時的の満足に過ぎない、故に苟も人と生れたからには、斯かる一時的のものでなく、永遠に變らない喜悅と満足を獲得せねばならぬ、然らばそれは何に依つて得らるゝか

之が全く人のことでない、桀紂といへば古い昔の人であるが、今此に私の話を聞いてゐる人の中に、我身を忘れて居る人がないとも限らぬ、かう申しますれば諸姉の中には、そんなことはありませぬ、歸る時を御覽なさい、必らず身體を忘れず門をくゞつて出て行きますからと、いはるゝか知りませんが、私の只今言ふのはそんな單純な肉體のみを指すのでなく、人には何程と價のつけられぬ尊い者を有つて居りますが、それを忘れて居る人がありはしないかと疑ふのである、然らばその尊い所の者とは何かと申しますれば、法華經の信仰である、眞の我である。

九、至誠と信仰

信仰と云ふは世間で申しますと至誠といふことで、人の真心であります、此の至誠を以て感ずる精神が、一度發動致しますれば、君に對し奉りては忠となり、親に事へ上りては孝となり、兄弟の間には友愛となり、朋友には信義、夫婦には相愛となり、社會同胞に對しては博愛同情となつて現はるゝものであります、故に

人と生れた以上、此の至誠の精神は固より必要缺くべからざる、尤も尊いものであります、私は更に一步を進んで君に對しては忠、親に事へては孝といふことの外に、絶對に向つて現はれ来る最も尊いものがなくてはならぬと思ふのであります、それは何かと申しますれば、即ち宗教的信仰である、今此の絶對といふことを一言にして申しますれば、佛といふことで、元來人の心の進路を辿つて見ますと、二通りありますので、所謂亡ぶる我と、亡びざる我との二つで、第一は其時其時に消長變化するもの、第二は一度起つた時は二度と消滅しない所のもの、即ち君に對し奉つては忠ならざるべからず、親に事へては孝行をせねばならぬと、一度決心した上は、決して變化しない處の、その根本をなせるもの、今一步進んで考へて見ると、死しても存續して行く尊い所のもの、即ち本體なるものがある、佛敎の言葉では、前者を小我と云ひ、後者を大我と申しますので、今爰にどんな美人がありまして、年を経るに従つて白髪になる、皺がよる、齒がぬ

ける、皆一時的のものに過ぎないが、只心中に有つて居らるゝ尊い所のものは、決して年月の移ると共に變化して衰へたり亡びたりするものでない、縦令齒がぬけようが、腰が曲らうが、君に對する忠、社會に向つての同情などは、一貫してゐなくてはならぬ、その根本となるものは心である、そこで此の眞心を推して行くと、永久に亡びない我といふものがある事に氣付くのである、今之を研究的に説き明かすことは六ヶ敷のであります、信仰といふ點から見ますと、永久に亡びぬ大我即ち眞の我といふ者が極めて了解し易いのであります。

十、眞の佛と眞の我

信仰と云ふのは、眞の佛様に向ひ、眞心から感ずること、古人の歌にも「闇の夜になかぬ鳥の聲さけば生れぬささの父ぞこひしき」とあります、實によく悟つた歌で、吾人は神に造られたものであるとか、やれ地水火風空の和合より成れるものであるとか、或は心識は物質の發達するに従つて出て來たものであると

か、種々様々に申しますが、實は決してそんなものではない、今この聲といふものに就いて考へて見ればよくわかる、聲は色もなく形もない、香もなく味もない然らば絶對に無かといふにさうでもない、馬鹿といはるれば何となく不快に感ずる、此のホールドも打たねは音を發せないが、打てば何時でも音を發する、即ち音は永久に存在してゐるものである、人心も亦斯の如くで、色も形もないからといふて、決して無いものではない、永久に亡びざるものがある、此の心は五十年や百年で消滅するものでない、生れた時に出來たものでもなく、物質の發達に従つて出て來たものでもない是を佛敎では不生不滅の妙體と申します、哲學上の言葉では實在といふのであります、之は各人が永久に有する本體である、如何に遲鈍になつて、豚の如くになることがあらうとも、一度それが恢復すると驚くほど敏活の働きを起す所のものであります、縦令八兵衛や十兵衛といふ小我は亡ぶることありとも、大我本體の實在の光明は常に發射して、間斷あるべきものでない

故に人世は勿論餓鬼修羅の様な悲境に陥ることあるも、佛は常に平等に大慈大悲の光を放ち給ふのである、親に對し至誠以て孝養を盡すが如く、絶對なる眞の佛の大慈悲に感憤し、即ち正意誠心の信仰を持つて見上らなければ、眞の佛の光明を拜することは出來ないのである、世間に生れては至誠忠孝の念の無いものは、人間としての價値はない、宗教に於ても亦永久に無限の光明を放てる眞の佛を、意識しないものは、人と生れた甲斐はないと誠にである。

十一、信仰の動機

人生も平々凡々で行けば其日其日は濟むものゝ、一朝事があるに際しては、中々さう平々凡々で濟まない事がある、例へば大切に撫育して來た愛子が死んで、痛切なる刺激を受ける場合、或は妻は病床に臥し子は飢に泣くといふ様な窮境に陥る場合、訴へんとするも訴ふる所なしといふ様な迫害の場合には、如何に無宗教の人と雖も忽ち宗教性の光明が眞心から發現し來るものである、されば一日も早く絶對の光を發射し給ふ

て居る眞の佛を信念し、その光明に接することが必要である、入世は常に春の如くであるとのみ思へる人は遂に信仰に入ることを得ない、常に仕合せのよい事のみある時は真心より感ずる心も出て来ないのである、親も達者で賢くてといふ様では、孝子の光を放つ機会がない、親が病気で蚊に食はれてゐるが、蚊帳がない百方策を廻らすも術がない、止むなく身を犠牲にして蚊に食はれて親の爲にする、之が二十四孝の孝子傳となるので、若し財産があり蚊帳も澤山あつたならば、決して斯かる美はしい事跡は起らない、所謂國亂れて忠臣現はれ家貧うして孝子出づで、信仰も何等か人の力のみにて堪へられぬやうの機會に觸れて、始めて起るものである、即ち病が信仰を起す導火線となることもあれば、愛子の死に驚かされて信仰に入るものもある、基督も順境に在るものゝ、信仰に入ること能はざるは、豚が針の穴を通ふるよりも難しといはれたが、實際さうである、彼の天上界等は卑しき人々としては理想的の境界で、美人を以て満され衣食にも住居にも

不足ないのみか、七珍萬寶を以て裝飾せられ、空中には微妙の音楽が聞えるといふ風で何一つ不足はないが佛は天上界に生るゝを悲まれて居る、それは丁度屈歩虫の木に上ると同様に、頂點迄達すれば再び下るの止無きが如くに、復た三惡道に落ちるからで、佛は之を遠慮三途と説かれてある、如何に身分尊く生れようが或は富豪の家に生れようが、よし酒池肉林の榮華を極めようが、彼も一時此も一時である、然るに一度絶對の信仰に入ると、衷心から悦が湧き出で、常に何とも言はれぬ法悦の境に住することが出来るので、恰も泥田の中に蓮華の咲た如くである、故に佛様も信仰を歎美して「人中の芬陀梨華なり」と仰せられてゐる。

十二、信仰の徳

吾人は日常惡覺妄想の起る此の人生に於て、信仰を守持せねばならぬ、この信仰は決して他の事と同様に思ふてはならぬ、泥田に咲た蓮華のやうに大切にしていかなばならぬ、世間では至誠が尊いとせらるゝ、如く、佛教では信仰が最も尊いものとせらるゝので、

て信仰より現はれる賜ものであります、要するに信仰と申すのは、真心を以て絶對の眞の佛に合するのでありまして、之によつて自ら上に述べた様な、種々の徳も生ずるのであります。

十三、釋迦牟尼佛

以上は下吾人の方面から説いたのであるが、更に上の佛様の方から説明して見ますれば、佛と申しましても其種類は澤山ありますが、畢竟それ等は、假に附けた名前に通ぎないので、眞の佛様と申せば釋迦一佛より外にない、彌陀も教主でなければ、藥師も救済主でない、絶對無限の大慈大悲を有せる尊き御佛といふは釋迦牟尼佛である、一言にして申しますれば、絶對の結晶して現はれたのが釋迦牟尼世尊である、そこで一歩進めて其奥を考へて見ますと、御互に吾人は此の絶對無限の佛様の御子であるといふことがわかる、故に吾人にも皆平等に尊い佛性といふものを有してゐるので、一度その佛性の光を發揮すれば、立派な佛様となり得るのであります、諸姉御承知の如く奈良の大佛

其尊さは到底言語を以て説き盡すことの出来るものでない、一度此の信仰を持ちますれば、佛陀無限の光明に接する事となり、次に精進の心が起りまして、如何なる艱難に遭遇し、如何なる苦境に陥るとも、悦んで以て其事に當り得る力が備つて来るのである、更に念といふて信仰は繰返せば繰返す程、其程度を高め光明を放つて、言ふべからざる妙味を感ずるので、世間の衣食の如く時を経れば飽きが来る様なことは決して無い、それから定と申しまして信仰があると、心の落付といふものが出来、大節に臨むも悠然として其心を動さない、さりとて又些細な事に立腹したり、ドギマギする様な事もなくなる、元來婦人の性質と致しまして些細なることにもドギマギする。ヒステリー性の人が多いのであるが、一度此の信仰に入れば、極めて平和の生涯を送る事が出来るのである、次に信仰ある人は智慧が自然に得らるゝので、此の智慧は世間一般にいふ智慧とは異つて、單に物を知るといふばかりでなく正直正路により世間の邪路に彷徨ぬやうになる、凡そ

は實に大なるものでありますが、尙あれを經文にある通りに造りますと、廣大なる身體で、到底日本位に入る佛様ではありませんが、夫ならあんな大なる佛様が尊いかと申しますと、決してさうでない、眞に尊い佛様といふのは矢張人と同一なる人格を有つて居て、それが極めて完全であり優美であり高尚であつて萬徳を具へて、其奥底には絶対無限の力を有し、其力は常に吾人の上に及ぼして下される所のものでなければならぬ然して吾人は又絶対の一現はれとして、自己固有の尊き佛性あることを悟り、正意誠心より出でたる信仰をもつて、佛陀無限の光明と接觸する、此に成佛の意義は成立ので、是を遺憾なく説いたのが法華經壽量品であります。

十四、壽量品と眞の佛

然らば法華經が無つたならばどうかと申す御方があられるかも知れませんが、法華經は眞の佛を説き明したものでありますから、縦合燒かうと捨てやうと、決して此の眞の佛様がなくなるものでない、眞の佛様の常住

是の念を作すと仰せられて、何卒して衆生を救ふてやりたいものであると、大慈悲の御手を垂れ給ふて居るのである、故に吾人は眞の佛の愛子なることを深く感ずると同時に、眞心から出たる喜びを以て、心と心との結び付きを定めねばなりません、そこで樂師の十二の大願とか彌陀の四十八願などは、法華經に來つては「但假の名字を以て衆生を引導すと仰せられてある、國に二王なく天に二日なきが如く、教主に多佛ある筈はないのである、縦合一切經が一萬卷あらうとも、釋尊一佛の下に統括せらるべきもので、この定論は破れる事は出来ない、日蓮上人は此の統一の意義を現はさんとして出で給ふたので、佛敎の正義正統を主張せられたのである、この法華經の主義、日蓮上人の確論が佛敎の全面を掩ふて居るので、一經一論や一宗一派の説と見るは大なる誤解であります、

十六、妙法と吾人

次に絶對の本佛と吾人とを結合する中介の形式と致しまして、南無妙法蓮華經といふ救済の綱を垂れ給ふ

にまします事は、釋迦牟尼佛の地上に降り給ひし事實のあらん限り滅ぶるものでない、人間の歴史から佛様の御出現が消滅するものでもありません、故に苟も佛敎を信する眞の人がある已上、大聖釋迦牟尼佛に絶對の光明を認むる思想が滅ぶるものではありません。

十五 慈悲の源

之に就いて面白いお話があります、彼の深草元政上人の所へ或僧侶が、樂師如來の十二の大願、彌陀の四十八願、悲華經の釋迦の五百の大願等を書いて、釋尊のお像の中に押込で、何卒之に讃を書いてくれと、依頼したことがあつたが、畢竟十二の大願も四十八願も五百の大願も、釋迦牟尼佛の慈悲の一部たるに過ぎないのであります、故に法華經に教へられて居るには、唯我一人能く救護を爲すと説いて、一切の纏まうを付けられ、更に又今此の三界は皆是れ吾が有なり、其中の衆生は悉く是れ吾が子なりと説いて、佛と吾人と父子の關係を以て示めされて居る、茲に來つては智慧も慈悲も悉く釋尊一佛に備へられて居る、毎に自ら

たのであります、是は恰も母が子に乳を與ふる乳房の如く、枯草に對する雨、病人に對する良薬の如きもので、佛は即ち母であり雲であり醫師である、吾人は赤子であり枯草であり病人である、此の妙法は乳房であり雨であり良薬である、この中介媒介に依つて始めて佛となり得るのであります、南無妙法蓮華經は實に乳房であり、雨であり、良薬であるから、此所をよく味はつて、更に日蓮上人が一命を賭してまで、此の意義を鼓吹せられたことを感じ、眞心から信念して法華經の敎の正しい事を知ると同時に、釋尊の大慈悲の御手にすがらねばなりません、即ち信仰とは一方から申しますれば、感じといふに外ならないので、諸姉が忠臣義士の芝居を見て感にうたる、の心を以て、今も亦眞の佛の温かき御心に感じなければならぬ、佛は大慈悲を以て常に我等の頭の上に御座ますのである、故に自我憐れの中にも、方便して涅槃を現するも、而も實には滅度せずと仰せになつてある、此の永久に亡びざる眞の佛様と、此の滅びざる眞の我との關係を

よく心得て、無始無終生死を超越したる信仰に入らねばならぬ。

十七 佛の五果

眞の佛は何を以ても形容し盡されない威力を有し給ふので、永久に存在して決して中斷することのない常住のものである、此の常住なる佛を少しく説明して見ますれば、大體下の五箇條に歸着するのであります、第一に常住不變の佛様は永久に、生命を有して居らるゝ、その生命は智慧と慈悲とに満ちて居らるゝのである、第二には永久の生命あると共に、立派な色相を有して居らるゝので、諸姉の髪や化粧は僅か半日か一夜で、毀れたり禿たり致しまして、如何に化粧の方法或は美顔術等を考究して見た所で、完全な美にはならない、然るに此の佛陀は理想美の極點に達して居らるゝのであります、今諸處に勸請致してあります佛様は、金色であります、印度に於ては人工美としては是が最上のもので、經文の中には紫磨金色と申してあります、この紫磨金色といふのは瑠璃と金との調和した色

様に、生命あり妙相あり活力あり安固にして且自在の四徳ある尊き佛様であるが、然らば眞の佛は吾人と全く縁のないものであるかと申しますと、決してさうでない、如何なる人と雖もこれと同じ妙體を具へて居るけれども生命に限りある吾人は悉く發揮することが出来ずして終るのであります、吾人が醫師を學べば醫師になれる、天文を學べば宇宙運行の様子がわかる、只其中に年をとるから悉く知り行ふことが出来ないものである、人は練習しなければ何一つとして出来るものはないが、習へば如何なることでも成し得る、僅か五本の指先丈でも琴であれ三味であれ、或は笛でも、其他一切の技術何でも出来る、之に依ても人は凡ての事をなし得る性能を具へて居ることがわかる、此の尊い力を完全に現はされたのが佛様でありますから、吾人は信心によつて此の佛を現はし得るといふことを自覺せねばならぬ、

十九 成佛の味

是が決して死後の事でない、遠い事と心得ふるは大

で、最も高尚優美であるといふ事であり、法華經の中には如き淨瑠璃中乃現眞金像とあり、實にこの金像を拜しましたならば如何に奇麗でありませうか此の尊い御佛は三十二相八十種好の美を盡したものでその美が自然と外に現はれてゐるので、外の經のやうに美を卑しめたり、或は假りに化粧したのとは大に意味を異にして居る、法華經の佛は實在の上に美を具へてゐるのであります、第三に斯の如く眞の佛は美の極であるとしませれば力は無いかと申しますと、決してさうでない、永遠に如何なる衆生をも救済する力を有して居らるゝのであります、第四には又此の美にして力ある佛は安と申しまして、何物か來ても犯されない嚴然として安固であつて、動搖變化を受けない徳を具へてゐるのであります、第五には無礙辨と申しまして總べて事に當りまして、物を處置するに毛頭障礙を蒙らない、自由なる力を有せられてゐるのであります。

十八 佛性の光

法華經に顯現せられました御佛は、以上述べました

なる誤解である、信仰の定つた人ならば已に佛位に入つたものである、此の佛の境界に入れば生れ變つたので、酔より醒めたのである、我に永久不滅の光明あり佛ありと、掌中の玉を見るが如く、常に實感せねばならぬ、之は貴賤上下の區別や職業の如何に關はらない一度信念に住したならば何人と雖も立派にこの妙味を味ふので、此の悦よりして社會百般の事業に従事したならば、更に貢獻するところも多く、愉快に刻一刻を送ることが出来るのである、之を譬へて見ますと、旅行をしても今日は何所迄行つて泊ると先が定めてありますと、誠に安心して行ける、然るに何所とも當がなく、深山に迷ひ入つたらどうです、日は暮るゝといふ様な場合には、必らず一步も進み得ないものである、是と同じで信仰のある人は常に安心してゐるゝが、信仰の定まらぬ人は深山に迷ひ入つて日の暮れるやうに先きがわからないから眞の安心が得られない、丁度今諸姉が傘を持つて來ておれば、この雨空でも安心して法を聽かるゝ如く、人生には常に目的點が手に入つ

て居らねばならぬ、何人も平和の時は安閑として知らずにあるが、一度愛子が死んだとか、財産を横領せられたとか、無實の罪に陥れられたとかで、死ぬゝに由なく、夫かといふて訴ふる所もないといふ場合、若くは死地に臨んで生くるの道なき場合には、必らず狼狽するが、此の時信仰ある人は決して天をも恨みなければ人をも咎めない、平然として事を處して行く事が出来るのである。

二十 信仰と生活

日蓮上人は「成佛の理をば時々刻々におぢはら」と仰せられました、實に尊い御言葉でありまして、一度この信仰に任したならば、縦令不孝の子があらうが或は貧にせまらうが、安心して行くことが出来るのである、故に信仰は平生の光となつて行くのであります、今諸姉の傘は外へ出てから雨に對して用心となるばかりでなく、此の堂の中に在て法を聞きつゝある時に已に安心を與へて居るので、信仰も亦斯の如くで、決して之を遠くに置かず、現在に持ち來り、時々刻々に成

佛の理を味はなくてはなりません、此の信念に住したならば、上人の如く四箇年間の寒苦も、破れ住居も法悦の中に暮らす事が出来るのであります、之に反し信仰は老後の仕事であると思ふてゐる人は、雨が降り出してから傘を求めようとすると同じで、傘屋は近所になく、よしあるも持ち合せの錢がない、雨の中をぬれ鼠のやうに、みすばらしく歩まねばなりません、されば老たるも若きも貴きも賤きも、皆共に真心より信念を捧げて、眞の佛を渴仰し、その法悦の中に現在を暮らさねばなりません。

(二六)

今此三界の文の心を 大納言 經 任
子を思ふ親のをしへのなかりせば
かゝる御法のありけるものを
後 成

社會學上より見たる日本の佛法

(本論は博士が上宮教會に於ける講演なり)

法學博士 有賀長雄

佛法のことは私は自分では一向特別の研究は致しませぬのでありまして、之に付いて御話をするのは甚だ越權な次第でありますけれども、此間中考へたことがございますからそれを申上げて見たいと思ひます、佛教もイロ／＼の方面から之を見ることが出来る、御承知の通り哲學上から見る事が出来る、哲學上から之を一の宇宙の説明法と見て果して満足すべき説明法であるや否やと云ふ邊から見る事が出来る、又宗教學として見る事も出来る、即ち信仰の個條としては十分に人に安心を與へるだけのものであるか否やと云ふことを見ることが出来る、倫理學上からも見られる、佛教に基くところの道德は眞に有徳なる人を造るものであるや否やと云ふことであります。斯の如くイロイロ見方があります、私の今日の御話は社會學上から見て行くのである、それで其問題の起る所以を申上げます爲めには簡略に社會學と云ふものゝ目的を申上

げます。

社會學は即ち此日本なら日本と云ふ如き文明したる一の社會を成して居るのは何故である、唯五體の具はつた人間の集まりであるが、其中に社會と稱する緻密なる組織がある、それで銘々が今日の生活を爲して居る、此社會と云ふものは何であるかと云ふ之を分析する學問である、それを分析して見ますとイロ／＼の勢力があつて人間を繋ぎ合はして居る、所謂社會上の社會勢力、先づ野蠻の時代には武力もあつたらうし、武力で強いものが弱いものを使つて一の社會を造つて居る、さう云ふことの出来なかつた時代に較べて見れば良い生活をして居るものがありませう、更に進んで來れば血縁、親族、親子夫婦等の關係からして個々別々の生活よりは更に完全なる生活を爲すに至つたと云ふ風に一の人間と他の人間と繋ぎ合はせる勢力が段々緻密になつて來るのであります、資本の勢力、學問の勢力宗教の勢力、皆是れ一の人間を以て他の人間を制する勢力である、さうして互にそれで益し合ふのである、初めは勿論自分の爲めばかりに他を制するのでありますけれども、段々開けて行くに交換的になつて來る、資本家は労働者を使つて居る、労働者は資本家に金を造ら

して居る、商人はイロ／＼商取引を以て互に他を利用すると云ふ風に互に相待つて行くのであります、斯の如く社會勢力と云ふものが殖えて行く程社會は完全になつて行くのであります、併し唯殖えるだけでは往かない、それが又段々調和して行かなければならぬ、互に軋轢する勢力はあればある程害がある、軋轢しない勢力が澤山にあつて社會が緻密に結ばれて行く國は競争上必ず勝つことになつて来る、畢竟申さば宗教とか道徳とか云ふことは社會學の上から見れば皆社會の產物である、即ち斯の如く一人を以て他人を制し而して互の生活を完全にする爲めに出来たところの勢力に過ぎないであります。

尙又序に國家と云ふものも説明して置かなければならぬ、是は議論を先へ進めて参ります順序として極く簡単に説明する次第でありますから其御積りで御聽きを願ひます、國家と社會とはどう云ふ風の違ひがあるか、此人間生活の多くのことは社會勢力を以てして居る、私が下女下男を使ふのも社會勢力でして居る、自分の子を使ふのも社會勢力でして居る、學者先生に物を習ふのも矢張金の力でして居る、イロ／＼な衣服や何かを買ふのも金の力である、大抵のものは金でして

ら、金を取立てる權力が任用である、又其金で事業を行ふことを命令する權力がなければならぬ、さう云ふ人は自然には出て來ない、誰も自分がさう云ふ人になりたいたいけれども、勝手にすることが出來ない、そこで之を社會學の言葉で申しますると社會に於て他人を利用する勢力の極く強い人、社會勢力の上に於て最も強い人が偶々さう云ふ地位を得れば得られる、即ち何處でも初めは君主と云ふものがあつて國民の上に立つて意思を極め、之を國民の上に行つて行くと云ふことは矢張社會變遷の上からさう云ふ人が出來て來て、それからしてゴツと今日迄歴史上の徑路を繼いで居る、若しさう云ふ人がなかつたら仕方がないから所謂共和政治にして皆が寄つて協議の上條件を極めてしななければならぬ、大抵何處の社會の變遷を見ても上代には社會上の勢力の最も強い人が君主となつて系統を垂れ自分一人の意思を以て國家の意思に代へて法律とか或は命令とか云ふものと爲し之を以て金を取立てるし事業をも決定して行くことになつて居る、さう云ふ人がなくなつた國は即ち共和政體を作り皆で相談して權限を極めて國會の決議を一般の意志として行つて行くより仕方がない、要するに國家と云ふものは結局は社會か

居る、即ち金は價格を代表するものであるから、總ての自分の力で得たものを金に換へる、それで又他の物を買つて行くと云ふことになる、錢が即ち社會勢力の手形であつて、それで他人を利用して我生活を完全にする方便に供するのであります、但し必しも金ばかりではありませぬけれども、金で出來る事が最も多い、今日吾々の發達に必要な事業は社會勢力に依つて行つて居ります、併ながら物に依つては社會勢力で出來ないことがある、どれ程金の力があらうが、どれ程の學問があらうが、どれ程威望があらうが到底一人若くは數人では出來ない、一人で出來ないことは數人の團結を造つてあるけれどもそれでも出來ないことがある、例へば國に兵を備へるとか、或は裁判制度を設けて誰も服従するやうにするとか、或は殖産興業のこととか云ふやうなことに至てはどうしても一人若くは數人の團結の力ではやれぬ、必ず國民全體から租税の形で以て金を集め之を以てしなければ出來ないことになる、それでである以上はそれは社會の勢力では往かないのであつて、國民全體の上に今度は此の仕事をする、それに付いては是だけ金を出して、今度は彼の仕事をする、之に付いては是だけの金を出せと云ふことで以て國民か

ら出來たものである、社會上の勢力の大にある人がなければさう云ふものは出來ない、社會上の勢力の非常に強い人といへば血族の上から言ふても、武力の上から言ふても、或は信仰の上から言ふても其人の言ふことは他人を十分に制することの出來る人をいふのであつて、さういふ人があつたならばそれが君主の地位に立つて國家を纏めて行く、さう云ふ人がない場合には出來ない、さう云ふ人があれば公共の事業が起て人々の生活が一層完全になりましますから生存競争に勝つと云ふ關係に由り何處の民族も國家を作ることになる。國家は社會勢力の結果である、是は普通のことでありませぬ。

さう云ふ譯で國家と云ふものが出來、國家には君主が出來ますからして其君主が君主たる地位を維持して行くに必要な社會勢力は成るべく集めるやうに、強めるやうに致し、又不便な社會勢力は成るべく除くやうに自然なつて來る、それでありましますから社會のことを研究するには單に社會勢力だけを研究する譯に往かぬ、之を國家から見ると國家と云ふ團結が出來てから後は如何になるかを考へなければならぬ、國家が出來た以上は社會勢力が皆國家に依つて制せらる、種々の勢

力の中必要でないものは段々省かれて行くこと云ふことを見なければならぬ、始終社會と國家と兩方見て居らなければならぬ、是が先づ今夕の議論の大體の基礎となることこの學理であります、是から本論に入るのであります。

此日本に於きましては佛法も自ら一の大なる社會勢力に相違ない、是が過去に於ては如何なる働きを爲して來たか現在如何、將來如何、斯く三段に別けて御話をするのであります。

佛法は過去に於きまして大に社會の團結を強くし、随つて又此國家の命令を行はれ易くしたと云ふ効力は確に歴史の上に現はれて居る、而かも本教會の本質であるところの聖徳太子、是が始めて佛法を政治の上に利用し之を以て社會團結の基礎とし随つて又國家の政令の基礎とすると云ふ考を有つた人である、如何となれば其當時は丁度さう云ふものが入用であつた、其時までは彼の骨殖の時代、即ち血族の團結力で國家を作つて居つた時代である、今日の一軒の家どころではない、何十軒も何百軒も集まつた親族の團結があつて之を「氏」といひ或氏は代々武力で以て朝廷に仕へて居つた、或氏は神を祭ることを以て仕へて居つた、或氏は

世清が来る、其表世清の歸るとき又妹子が参りせした、其二度目に参りますときに八人の學生を伴れて行かれた、其學生の半數は佛僧であり、半數は漢學者でありましたが、それが歸つて來て漢學を政治に應用することを努めた、それが即ち他日鎌足公が實行されたところの大化改新の源因である、さうして見れば聖徳太子は佛教の方面で直ちに之を政治に利用することに於ては成功して居られませぬけれども、其爲めに漢籍を盛んに入れられたことに付いて大化改新の準備をされたと云ふて宜いのであります、それから佛法も勿論同時には是は政治の基礎とこそは直ちにになりませぬけれども、人心を收攬し政治をして行はれ易からしめるところの社會勢力には確になつた、さう云ふ風になるやうに始終國家が之を利用して來たのである、それで奈良朝の神佛合體即ち本地垂跡の論となり、天照大神は盧舍那佛であると云ふやうに總てのことを矢張佛法で説明して行くやうにして、さうして朝廷の力で以て大きな寺院を興し人民の安福を祈り人心を成るだけ争はないこととして政治をして行われた、此時の佛法は矢張社會の大勢力であつて國家が之を利用して居りましたので、王者が其王命をして國民の上に行はれ易からし

地方を治めることを以て仕へて居つた、皆大なる親族の團結で國家の事業を行つて居つた、親族團結と云ふことが國家の政令の行はる、基礎になつて居つた、然るにそれが多くの弊害を生じて段々氏の中に強いものが弱い氏の地面だの人民だのを奪ひ取つて我儘を行ひ、普通の親族關係から使ふことの出来ないものまでも使ふ、遂には君主の權力をも凌ぐことになつた、それで蘇我氏と物部氏との争權となつて天下離散し、どうなることか分らぬと云ふ時代になつて來た、丁度其時分に儒佛が入つて來ましたから之を以て再び人心を結び直す基礎にしようとして云ふのが聖徳太子の主義であつた、それは歴史の上では無い、唯それが成功せられたか否やと云ふことは別の問題である、私共の歴史上の研究からすると云ふとそれは行く行かなかつた。佛法を基礎として日本の國家を纏めることはむづかしかつたけれども、其時の歴史上の事實から申しますると聖徳太子の成功は幸ろ佛法を入れるために儒學を一層盛んにせられた、點に在つた、それが却て大化改新となつて成功して居るのであります、即ち經文を求めたために直接に隋と交通を開いた隋の煬帝の大業三年に妹子が参りまするし、それからそれに付いて向ふから表

むるやうにするに餘程役に立つて居つたのであります。尙又聖徳太子の功德を申しますれば決して儒佛の上にはかりに止まらない、それに附隨して例へば諸方に寺を建てるに付いては美術が盛んになる、建築が盛んになる、斯の如き結果は今更言ふまでもない、日本の繪畫の如き、彫刻の如き皆此時から始まつて居る、是も矢張自から人心を纏めて調和させ面して社會生活を豊富にし國家を平安にして行く原因になつたに相違ない。京都藤原氏時代までは矢張神佛合體で本地垂跡の世の中でありました、是が大成したのは御承知の通り弘法大師が出て來られて後のことであります。藤原氏の末には御承知の通り段々大寶令の制度が亂れまして各地方に豪族が起る、京都の貴顯に至るまで各地方に莊園私領の富を争ふことになつた、随つて寺にも段々多くの地面を喜捨する人があつた、而かも寺は國司の支配から獨立してある以上は其土地は税を拂はぬ、寺自身は支配すると云ふやうな形勢になつて來た、源平以後は多く僧兵を養つて戦争までもしたことは御承知の通りである、さう云ふ形勢はそれは社會上から見て甚だ面白からぬ形勢である、寺が自分の領地

を防禦する爲めに澤山の人間を養つて、遂には莊園の奪ひ合ひをすると云ふことは甚だ面白からぬ、是は寧ろ社會を害する方の勢力になつたのでありませうけれども、鎌倉時代になりましてから斯の如き弊害を制する譯には往かないから鎌倉は鎌倉で、鎌倉の武力の政治の下には斯の如き佛法を立てさせないと云ふに付いて別に支那の宋元時代の禪宗の坊さんを迎へ禪寺を建て清麗寡慾高潔なるところの禪宗を盛んにしうして京都の理想以外に別に鎌倉の純潔なるところの理想を造つて、京都には全く違つた文明の種類が出来た、京都の文明は元は支那から来たに相違ありませぬけれども濃厚豊富な文明である鎌倉は其反動でありませうから寧ろ清閑高潔と云ふ方であつて、質素にして氣品の高いところは寧ろ當時の京都に勝るところの文明の中心が鎌倉に出来て来た、是も佛教の力である、而して此精神が當時の武士の心を和げ且纏めて行つたのである、それから鎌倉五山が其中心でありましたけれども、足利氏になりまして京都と一緒になりました、京都へ鎌倉の風を移した、それで京都にも五山が出来た、兩方のものが合體したと云ふのが即ち室町の文明である、總て斯う云ふことは矢張佛法が助けて居る、詰り

た、そして家康の方が普通の僧侶よりも寺院の格式に付いては明るくなつたと云ふ位、又公家の記録も集めてさうして三家法度を作つた、即ち公家法度、武家法度、僧家法度、此公家、武家、僧家の三階段を支配する法律を天子の命に依つて拵へた、天子の命と云ふ條自分が注文して天子から其命を下げて自分が拵へた、さうして全國の僧侶を統轄した、何處の寺にはどれだけの格式がある、紫の法衣は何處々々の寺に限ると云ふ様なことまで定めて荷くも其格式に外れたことをすれば縦令天子が許したとても通さないと云ふ風にして制度の上に利用したのであります、其大成したのは皆さん御承知の通り三代將軍の時であります、此時島原一揆が起り宗教上から國民を取締らないと云ふ、云ふ騒ぎを起す、それで全国各地方到處に寺を建て寺を以て戸籍役場とする、子供が産まれば寺の人員帳に記入して置き人が死ぬときは坊さんが来て屍體を檢査して法號を授けると云ふことになつた、即ち佛法を何處までも國政に利用した、それで明治まで来たのであります、是は過去の歴史であります、

維新になりましてからはどうであつたかと申しますると、明治の初年に於きましては一時神道を國教にする

文明と申しますると種々の社會勢力が調和して行く自然に其調和の結果として面白い産物が出来て、美術の上から言ふても、風俗の上から言ふても愉快なる産物が出来る、さう云ふ有様を文明と云ふ、其文明は佛法が確に助けて居る、寧ろ儒教以上の勢力となつた、元來大寶令は儒教に基いて出来たものであるけれども、儒教としては國民全體の精神を纏めて居らぬ、地方に國學と云ふものもあつたが、決して全國には出来て居らない、學問は京都に限る、京都と雖も五位以上の者の子孫でなければ大學に入ることを許されないから學問が出来ない、一般人民を纏めて居つたものは佛教に相違ない、斯の如く是だけの所までは確に佛教の社會に於ける効力と見ることが出来る。

又足利以後の變亂を経まして徳川氏になりますと、家康はアレだけの智恵である、又吾々の社會學の眼から見ると云ふと家康は大社會學者である、種々の社會勢力を利用する、之を利用する上に於ては餘程巧みな人であつた、恐らく日本の社會政策家としては家康、鎌足二人の右に出るものはない、此家康が眞先きに僧侶を支配する權を収めなければならぬ、僧侶に威張られては堪らぬと云ふところから主なる寺院の記録を集め

と云ふ考で佛法は捨てものにせられた、初め民部省に社寺を取締る役所を置きました、多くは戸籍の關係からであります、それから大藏省に移つた、大藏省の戸籍寮に社寺掛があつた、併し宗教として之を管理したのではない、宗教としては明治初年は寧ろ太寶の制度に立戻ると云ふので諸官の上に神祇官を置いて宣教師を各地方へ出し、維神の道を説かしたもので、其際は佛法は一時棄てられたものである、所が明治五年になつて事が面倒になつた、それは私共は直接に記録を見ないけれども、此處の河瀬さんなどは能く御承知であります、多くは西洋の方面から事がやかましくなつて来た、日本が臣民を盡く神道に引入れることは公平でない、既に日本には耶蘇教徒もあることであるから、さう云ふ制度は宜しくないと云ふやうな議論もあつた、尙又文明國に於ては信仰を自由にしなければならぬ、神道の好きなものは神道に入り、佛法の好きなものは佛法を信じ、耶蘇教の好きなものは耶蘇教に歸依する、何でも構はない、信仰を自由にしなければならぬ、然るに自由にすると甚だ困ることがある、日本人で神道を信じない者は日本の臣民でないと言はなければならぬ、所が信仰は自由であると云ふことになると

日本人でありながら日本の天照太神を有難いと思はぬでも構はぬと云ふ結論に成つて来るそれは又甚だ苦しい、それで神道は唯だ神を祭る儀式とあつて、宗旨でない、是は信する信せぬの論ではない、日本臣民たるものは必ず誰しも行はなければならぬところの儀式である、それを率ゆるところの人は、天皇陛下である、是は宗旨ではない崇祀である、但し神道でも之を宗旨として説くことは自由である、其方には所謂黒住派だとか御嶽派だとかイロ／＼な派があるが、それは佛法や耶蘇教と同じやうに見てしまふ、信仰としては佛敎も耶蘇教も神道も制度は同じやうにして、祭祀としては國家が之を監督する、斯う云ふ方に段々傾いて参りました、初めは社寺局と云ふものが一緒に居つたのが、遂に今度は神社局と宗教局と分かれた、神道が兩方に入つて、官國警察、及郷社の祭のことは神社局それから説教をする方のことは是は皆宗教局に移すことになつた、そこで宗教を國家の爲めに利用すると云ふことがなくなつてしまつた。

天皇陛下が即ち社會の會長である、社會の上から見ると最も貴尊な人で社會大勢力の中心である、國家に號令されて行くに付いては宗教の力を借りる必要がない、然らば佛法は今日どう云ふ扱ひになつて居るか云ふと、今日の佛法に對するところの國家の主義と云ふものは甚だ漠然としたもので、多くのことは内務省令で極つて居つて勅令などはあまりせぬ、併ながら是もイロ／＼な法規の上に現はれて居るところのものをみると云ふと詰り西洋で云ふところの「並立制度」若くは「認容制度」と云ふものに當つて居る、餘り善いこととも思はぬけれども悪いことでもないから國家に害の無い範圍内に於てやらして置くこと云ふ主義である、宗教の方の制度は自分で極めさせて國家からは命令はしない、併し國家に害のあることをしてはならぬから所謂教規宗則と云ふものを設けて國家の認容を経なければならぬ、各宗各派に管長を定めまして其宗旨々々の僧侶を取繕らして居る、管長だけには勅任の待遇を與れてある、是は宮中の待遇です、それから寺の創立、初めて寺院を建てるとか、或は教會堂を建てるとか或は移轉をするときには認可を経なければならぬ、それから民法を以て宗旨に必要なところの物件は差押へることが出来ないことになつて居る、又寺院の所有地は地租を課さないことになつて居る、又地方税も課さないことになつて居る、それから社寺上地林と云も

い、唯儀式として崇祀と云ふ力がありさへすれば宜い其方は即ち國家の禮典に利用する、普通の説法をする神道とか其他佛法、耶蘇教は利用しないと云ふことになつて居りませぬ、例へば官國幣社神職奉務規則の

第一條 官國幣社神職ハ國家ノ崇祀ニ從事シ國家ノ

禮典ヲ代表スル職務タルヲ以テ平素國體ヲ辨シ國典ヲ修メ躬行ヲ正シクシ以テ本務ヲ盡スヘシ

第二條 官國幣社祭典ハ國家禮儀ノ標準タルヲ以テ

齊肅恭敬ヲ首トシテ報本反始ノ誠意ヲ表スヘシとある、此方は國家に利用されて行く、それでありませぬから此方へは段々保護が付く、即ち神職は皆國家の試験を受ける、國家から任命される、神官は伊勢の方を云ふ、神職は外のもの、それから金は法律が出来まして國庫から出ることになつた、官國幣社經費國庫支辨に關する件と云ふ法律が三十九年四月出来て居る、其他神官も神職も位を貰ふことになつた、先日は勳章を賜はつた、皆は貰はなかつたでせうけれども、日露戰爭の時能く神様を御祀りしたから、神様が日露戰爭を勝たせて下さつた其功勞と云ふのでせう、坊さんの方は反物を貰つた、貰つただけで宜いのです、棄て置かれたつて仕方がない、耶蘇坊さんは何も貰ひはし

のがあつて維新の際寺から取上げた地面を或は貸下げ或は下戻すやうな制度も出来て居る、是は元と取上げられたものだから餘り有難くない、皆返して呉れると云ふがさうも往かない、願ふと一部分を返して呉れる或は官有地となつて居るものを寺に貸下げて呉れる制度もある、又寺で營林をしようと木材の半分は寺に呉れる制度もある、是は寺に限らない、誰にでも許される――所謂部分林と云ふ制度である、官林を貸下げて其利益を營林者と分つのである、さう云ふやうな制度が出来て居る、社寺保管林とか社寺上林地とか斯う云ふものは寺院ばかりではなく神社の方にも適用せられて居る、兎に角宗教を宗教として保護する意味ではない、宗教と云ふことが自然に其處に出来て居る、それは國家に多少の益があつて害がないものであるから國家から幾分の便宜を與へるが、今日之を政治の基礎にするとか、教育の基礎にするとか云ふことでなく却て政治教育に關係させぬことにする主義である、御寺の坊さんを小學校の教師にするには止むを得ざる場合の外成る可く許さない方針である、又選挙法、市町村の公共團體に於ける役員と云ふものは成るべく宗教家を使はないやうになつて居る、總て佛法を政治教育の外に立

たせることになつて居る、是は此教會の規則にも書いてありまする通り頗る議論のある點である、併し唯今は現在の日本に於ける佛敎の社會學上の地位は詰り社會上の一勢力たることは認める、——社會上の一勢力たることは認めるけれども、夫程に今日の文明世界から見て大切な勢力でない、今日はモツと外に大切な勢力があるからして、佛敎は勝手にさして置く、幾分の便宜を與へてやるけれども大に利用することはしない、勝手に榮へたり衰へたりすると斯う云ふ制度である、それで其處を能く考へなければならぬ、そこで現在の此佛敎と云ふものは果してそれだけの價値しかないものかどうか、國家からして耶蘇敎や何かと同じやうに扱はれて居るがそれで宜いのかどうかと云ふ問題になつて来る、其問題を決する爲めには實際今日の社會に佛敎がどれだけの勢力を有つて居るか云ふ事實を研究して見なければならぬ、或は價値が有るか無いか、先づ私其要點を書列べて見たところが次の通りである。

先づ第一此現在の世の中にある、赤かつたり黒かつたり、大きかつたり小さかつたり、美味かつたり不味かつたりする現在の有形の物體、吾々の情性感性に訴へつて居る、何處へ行つても景色の佳い所には必ず寺院がある、名所古跡には必ず寺院があると云ふ風であらう、一向其宗旨を信じないでも其寺院に行けば何となく信仰心が起る、此過去の歴史は無論吾々の生活の上にも有力なる勢力を有つて居る、之を除けてしまつたら日本人の生活は餘程淋しくなる、是がある爲めに美術も起れば人の氣性も高尚になつて居るに相違ない、宗教としてでなしに唯過去の歴史上の勢力として一の有力なる効果があるに相違ない、

第三に佛法の今尙は社會の一勢力たる所以は人間は最も恐るゝ死といふ事に關係して居る人間は活きて居る間は何とでも彼とでも言つて居る、サア死ぬとなると心細くなる、何處へ行くのだらう、斯うなつて來ると、日本人は外の新しい宗旨、耶蘇敎なら耶蘇敎に入つた人はイザ知らず、入らぬ人は「は」とけ様」がなつかしくなる、平生は何とも思はぬが自分が死ぬ時でも人が死ぬ時でも死ぬとなると後生の考が起る、死だ者は何處へ送らうか、兎も角佛敎と云ふ道があつて、極樂淨土があるといふことだから其處へ向けて送る方法にしたら宜からうといふ事に成る。どうしても此日本では佛式の葬式が行はれて居る——神道の葬式もあるが

るところの物體、是れ以上に更に高尚なるものがある何か分らぬが人間は現在の世界ばかりで生活はするものでないと云ふ考を人間に有たせることは日本では佛敎が矢張り一番力が強い、今迄それでやつて來た、それは餘り儒敎で説かないけれども、佛敎は常にそればかりを殆ど説いて居つた、到る處に寺院があり、到る處に地蔵もあれば墓もある、さう云ふものを見る度毎に何か現在の世の中以上のものがあると云ふことを吾々の頭の上にも有たせて居る、それは佛敎が一番能く説明して居る、それは遺傳性であるから仕方がない、其結果として人間が現在の事物ばかりを争はない、現在の事物ばかりに醒醒しない、どこかに高尚な考を持つて居るそれが一の勢力には相違ない、今日は哲學と云ふものがあるけれども、それは誠に少數の人間に限るから、連も社會の勢力と云ふまでには往かない、少し間違へば瀧へ投身したり鐵道自殺をする人が出來る位の事で佛法の如く一般の勢力には決してなつて居らな

50

第二には過去の歴史と云ふものが恐しい、佛敎は先刻申し上げました通りに日本の過去に於ては此社會を此形にする上に於て大勢力であつたそれが吾々の腦裡に殘

佛式から眞似たものである、大した違ひはない、或人は佛葬神葬兩方をやつて居る、此間伊藤公は兩方で葬むつた、今は何方へ行つてござるか分らない、國葬は神道であつて邸に歸つて來ると佛葬でやつて居る、一方は十日祭、一方は七日目七日目日が違つて居る、兎に角佛敎は今日の社會でも死と云ふ事に付て一般の人心を支配して居る人の死後を掌て居る。

それから第四は即ち本統の信仰として人を制する力があるか無いかの問題であります、是はどうか、本統に佛敎と云ふものを一の信仰として安心立命の地位を得るため之に歸依すると云ふ點から人を支配する力があるかないか此の點からはどう云ふ程度まで人を支配して居るか云ふと、それは下級の人に對しては随分有力である、夫の本願寺の如きはまだ餘程勢力がある世の中に金ほど大切なものはない、それを喜んで喜捨すると云ふのは勢力のある證據である併し社會全體を動かす社會の中心となつて文明を動かして行く丈の勢力があるか、今日の社會を眞に宗旨として支配して居るか否やと云ふことは是は問題である、私の見る所ではどうも此點は十分でない、さう云ふ點から見ると一般の信仰であるとは言はれない、禪宗などは高尚なもの

である、禪宗には限りませんが、天台でも眞言でも信仰者がある、僧侶以外にも之を信じて居る人がありませうけれども、それで今日の社會生活を支配するとまで行つて居るか云ふとさうではない、是は寧ろ隱居仕事、物好きと云ふ方が適當かと思ひます、學生の中にも宗教を奉じて居る人がありませうけれども、未だそれに依つて一身を立てると云ふ程のものになつて居るものはない、先づ是だけは現在の有様である、それで將來を此儘で押通してやつて行つて宜いか悪いかといふ問題に歸する、信仰としての佛法は今迄の様なやり方では段々勢力が薄くなるかは知れないけれども、眞に社會の上下を通じて支配するだけのものにはならない、ならさうと思へばどうする、此處で奮發をしなければならぬ、唯是だけのことであると云ふと、今日迄の如く寺が種子扱ひをされて居ると云ふことも餘りに不思議でない、それで之を眞の活きた社會勢力にする、之に依つて社會の文明が着々進んで行く、國家も之に依つて治め易く、個人も之に依つて身を處し易く學生に至るまでも心の底に之を置いて此前の講演にありました如く之を源として總てのことを是から汲出して來る、流れ盡させないところの本源とするには何か

一工風しなければならぬと私共は考へて居る、夫故是から將來のことに互るのである。
無論私の是から申上げますることはツシなるとは佛法には昔からあると云ふことも知れない、けれども今日の社會學と云へば即ち外ではない、活きた社會の或は進み或は退いて行くところの活劇の上の言葉で申し見ればどうでも今日の人間の心は一言に約めて言へば厚生と云ふことが主一の目的になつて居る、生活を厚くすると云ふ方に向いて行く、總てのことが之に向いて居る、宜いか悪いかは誰も考へはしない、兎に角生活と云ふことは無限に進められることである、生活とは自分以外のものを、自分に利用する、自分の力を伸ばす、米や肉を食つて五體を養つて行く計が生活ではない、總て自身の外にある電氣とか數理とか物理とか、物質とかと云ふ總てのものを自分の生活の範圍に入れてそれで以て自己の立場を頭丈にして行く、必しも人から奪つてではない、己れにも益し人にも益するものでなければならぬ、此考は今日の世界に非常に勝つて居る、殆どそればかりである、先づ之を別けて申しませうれば個人の生活は勿論大切にしなければならぬ、個人の生活の中には身體上の生活所謂衛生、家族

的生活、即ち親族の力、親族關係を利用して互に親は親、子は子、女房は女房として其生活を濃厚にして行く、豊富にして行く、所謂家族生活次は社會生活即ちイロ／＼な人と交際して相依り相助け其交際に依つて互に益を圖つて行く、次は經濟生活、即ち自己の財力を造り人の財力と交換して行く、或は政治政策、先刻申上げた通り一個人若くは數人の團結で出來ないものは國民の力を集め其力で經營して行く遂には自分の國だけでは満足しないので諸外國と互に交換を仕合せて國際生活までやつて居る、何でも彼でも今日では此通り生活の範圍を進めて行く、此世の中の生活は詰らぬものだから斯んなものはいらない早く死んでしまつたが宜いと云ふ方の側ではない、詰るやうにもつと段を進めて行く方の考ばかりに成つて居る、所が佛法はイロ／＼人に依つて説き方も違ひませうけれども、兎に角今迄の佛法の説き方も早くさう云ふものは見限つてしまつて、少しも慫も徳も無い、慫と云へば總ての慫を網羅したところの慫、徳と云へば總ての徳を網羅したところの徳、早く總てのもの、窮極に行つてしまふが善いと云ふ方の側のものである、今の社會とは反對の方面に進んで行くべきもの、如く説いてあるイロ

説き方はありませうけれども、さう云ふ風に佛法は生を厚くすると云ふ今日の趨勢とは一寸違つて居る、尙私は佛教に於て大乘小乗と云ふことの區別をすることは抑も今日佛教が流行らないやうになつた原因だらうと思ひます、流行らないでも宜いと云ふならそれで宜いか知れぬが、元來人間の勢力は對等のものである、それを是は低い人間だから小乗にしてゆく、是は高いから大乘を説てやると云ふことはもう今日の社會では駄目でありませう、人の智力を輕蔑する譯でありませうから皆が大乘でなければならぬ。
されば佛法の説き方を改良して社會現在の生活狀態に合はして未來を説くことが出来るや否やは一つの問題である、それは多少今迄の佛法にもあることには相違ない、例へば釋迦の言ふた所謂四種の恩と云ふ中には國王の恩と云ふこともあれば、衆生の恩と云ふこともある、此衆生の恩と云ふことなどが互に相助けて今日の生活を豊かにして行つてさうして互に早く極樂淨土に達し易くすると云ふ意味かも知れない、それから國王の方は矢張國家の制度を正しうし國土を安穩にして呉れるから敵が來たり賊が起つたりしなくて安樂に往生することが出来ると思ふ、それか

ら三寶の恩と云ふことも言ふやうである。「佛言。世間之恩、有其四種、一、父母之恩、二、衆生之恩、三、國王之恩、四、三寶之恩、如此四恩、一切衆生平等荷負」と云ふことになつて居る、併し「ナラ」といへば佛法よりも儒道の方が遙に善く厚生に理に適つて居る、今日衛生と云ふけれども昔は衛生と云ふ言葉はない、身體髪膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の初めなり、是が衛生である、家族生活といふ字はないけれども父母の事をやかましく言ふ、國家生活のことは矢張君臣の道とか云ふことをやかましく言ふ、唯儒道では現在の事を多く説き未來の事が脱けて居る之に反し佛法は未來の事を重くとする其處で儒と佛とを疏通させることが出来ないかと云ふのが問題である、それは北島親房は既に神儒佛の一致と云ふことを説いて居る、又卜部兼俱は唯一神道の説を唱道して「神は道の根本、儒は道の枝葉、佛は道の果實なり」として居る、さう云ふ風に聯絡を通じてある、若しも斯う云ふ風な説きやうはあるまいものか、即ち今日の世の中から考へると云ふと社會生活の中に入つて社會生活を盛んにすればする程我々の生活も豊厚になれば人の生活も豊厚になる、此の如く私の生活を豊厚に出来るだけ進めて行け

延山旅行中に於ける

予の所感 (續)

城 山 生

三 山川に就て

我祖上人は足跡到る所として我境一如の状態であらせられたことは諸御書に明かであるが、此の身延に御出になつてからも亦實に四圍の境遇と極めてよく一致合體せられて居たと感じたのである。

第一思親園附近一帯に於て最も著しく眼に影するものは甲斐駿河の二國に跨り巍峨として天空に聳ゆる富士の山であるが、予は此の富士山を手にとる如く見ることを得て一種言ふべからざる感に打れた、外ではないが我が宗祖上人も六百年以前此の處に登り給ひ、彼の富嶽を眺められたに今又其流れを汲む吾人爰に其昔をしのぶは何たる幸であるかと、そらるゝに涙を催した、そこで予は上人が富嶽を眺めさせられたに就ても何等かの意味はありはしなかつたかと考へても見た所が不圖次の様な感が浮んだのである。

富嶽は海拔一萬二千尺千古の雪を載いて皚々として天空を摩せる姿は、清淨にして潔白なる山は我以外に無

ば人間の能力はどの位進むか知れない、今日の不完全な個人の智力を以て考へられないことが將來は考られるかも知れぬから、先づ兎も角今日の世の中にある以上は十分力を盡して生活を豊厚にすることが他日早く佛智に達するところの方便であると云ふ風に説くことの出来ないものか、要するに今日の社會に於て世を益するところの佛法は自力でなければならぬ、今迄の佛法の多くは他力である、已むを得ず人を導く爲めに自力を説いて居られるけれども、佛法の心髓は他力にある、それでなしに、自分から苦心して此厚生に道に盡して行かなければならぬ、行けば行く程餘計に早く且善く佛様が迎へて下さると云ふ風に説きたいのである、今日の時勢に處して右申したやうに若し説けるならば佛法は儒道以上のものであるから吾々も之を信する事を吝ないものである。それで大體の趣意が御分りになりましたらうが、之の佛法を現世に利用して聖徳太子の事業を繼いで今日の時勢に合ふやうに之を説き變へる所の大智識はないものか、斯う云ふのが私の平生社會學を研究しながら考へて居るところであります。(完)

いと、誇り顔にも見ゆる、形よく波狀をなせる群山を踏臺として立てる姿は、超然として世俗を脱し寂然不動なるは吾を措いて他に決してないと言ふてゐる様にも見ゆる、然して此の山は何時頃出来たと歴史にもない又何時頃鳥有に歸すると豫言したものも聞かない、六百有餘年前の宗祖も眺め給ふれば、今日吾人も亦此の山を望む、今後何百年何千年後の人も亦眺るであらう、實に此山は無始無終の山である、斯の如く潔白であり不動であり無始無終なる山は確かに唯一不二である言葉を換へていへば第一の山である、さればこそ詩人も歌ひ書にもかく、山といふ山は澤山あるけれども詩人の眼に映し書畫の材料となるは此山のに次ぐものは殆んどないといふも過言ではあるまいと思ふ、予は是を稱して完全圓滿な山と呼びたいのである、上來予は潔白、不動、無始無終、唯一不二、圓滿、の五を擧げて大略富嶽の形容を試みたが、宗祖も亦此の様な意味で富士を眺められはしなかつたか、即ち汝富嶽は潔白なる如く我も亦潔白なるぞ、汝富嶽が超然として群山を脱して不動なるが如く我も亦衆に抽で、不動なるものなるぞと眺められはしなかつたか、夫は上人の御書によつても充分推することを得るのである、今頃は

しいから多くを擧げない開目抄に

大願を立ん日本國の位を譲らん法華經をすて、觀經等について後生を期せよ父母の頸を刎念佛申さずばなんどの種々の大難出來すとも智者に我義破られずば用ゐるとなり

と仰せられ國王の位を譲るから念佛を申せ然らざれば父母の頸を刎るぞと迫らるゝも、眞の智者に我が此の主義が破られなかつたならば決して應じない服さない言葉は換へていへば智者に破らるれば夫に従ふぞと仰せられてゐる、之によつても如何に上人が其主義信仰に於て潔白であり、又超然として世俗を脱し不動であり泰然自若なりしかは察するに餘りある次第である、斯く潔白であり不動である上人の主義は又自ら富嶽と共に心靈界に屹立し永遠に傳へらるべきものであるとの大信念もあらせられた、此事は御自ら本化上行の再來と名のり此法華經は末法萬年の外未來迄も弘まり永遠に衆生を導利すべきものであるとの主旨が御書到る所に説かれてゐるに徴するも亦明かである、斯くの如き潔白で不動で然も無窮の功德を及ぼすべきもの故、此日本否世界に於て唯一不二即ち最大一であるとの確信があらせられた、故に日蓮は日本一の法華經の行者

しつゝあるといふ事は或人から耳にした所であるが、爰を以て考へて見るに誠によく富嶽と上人の主義信仰とが關を程々にもよく符合して居ると思ひますので思はず上に述べた様な感想が浮んだのである。

第二に身延附近は御書にもある通り早川身延川大白川等いふ河が澤山あるのであるが其流れ殊に源をなせる深遠たる溪流を見ては一種壯美の感に打たれ、上人は確かに我が主義は亦此水の如く潔白にして、然も此水の流れて止まない如く永遠に流布して衆生を利すべきものであると堅く信じて御出になつたではあるまいか、然して此水や今は吾人に向ひ汝等は我が如く潔白なれ、謙遜なれ、我が如く永遠に退轉なき信仰を持ってと語りつゝあるかの如く感じたのである、嘗て支那の孔子は水を見て、子在川上曰逝者如斯夫不舍晝夜といはれて造化の滯らず道は常に行はれつゝあるといふことを述べて學者輩を戒められたが、我上人も亦此水を御覽になつて

前には湯々たる流水堪へて實相眞如の月浮ひと申され又上野抄には

此はいかなる時も常に退せず間はせ給へば水の如く信じさせ給へるか尊し尊し

なりとか、日本國に第一に富めるものは日蓮なるべしとか其他類はしい程第一と申されてゐる、そこで予は果して上人の主義信仰なるものが斯の如きものであつたとすれば、上人は亦彼の圓満不二の山を目し吾も亦汝の如く心靈界に於ける圓満なる山なるぞとの信念を以て眺められはしなかつたか。

上述した所を簡單にいふたならば上人は彼の富嶽を御覽になつて、汝は客觀界に於る唯一不二の圓満なる山であるが、吾は主觀界に於る唯一不二圓満なる山である、故に苟くも眼識あるものならば我が主義を理想とし波狀をなせる群山に等しい、意義根底の無い宗旨等に注目するなどの觀念で此富嶽を眺められてはるなかつたかと感じたのである、夫には特に予が痛切に感ずるのは由來富士山は詩人に歌はれ書にもかゝれたもの、餘り登山するといふ事を聞かなかつたが近來頻りに此登山者が多いといふ一事である、官吏學生を始め労働者昨年等は盲目連等も登山したとかである、竊て此心靈界の日蓮主義なる山はどうかと省みするに、是又一瀟千里の勢で博士學士を始め辯護士軍人等に迄も研究せられ一大偉彩を放ちつゝあるので現に今日において、一部は無學文盲といふ盲目連も亦此恩澤に浴

と仰せられて、法華經を信仰するも一時熱に浮された様な信仰はだめである、須らく水の流れて愈止まざるが如き信仰を持って始めて尊きものであると申されてゐる、即ち上人は悟道に於ても信仰に於ても水を理想とせられた事も亦疑ないのである、又彼の孔子は、子曰智者樂水仁者樂山といはれ智者は事物の道理によく到達して少しも滯る所ないのは、水の流れて止まない如くなるより其動いて流行の趣あるを喜び、仁者は義理に安んじ性質温厚で重々しく遷らざる事は山の幽靜であるが如くなるより敦厚の基あるを説かれたのであるが、實に我上人は此兩面を兼てゐられた事も明である。其絶上人の身延記を一度拜讀すれば、如何に四圍の境遇に無限の趣味をもつて居らせられたか、わかかる蜘蛛が巢をくみて彼の細い糸に、雨露がかゝつたのを御覽になつては、さうがにの糸玉を連さ、と仰せになり水唱や珊瑚等を糸に連ねてよりも美はく御覽になり、懸樋の水に渥丹の紅葉が影すれば、名にしおふ龍田の水もかくやと疑はれ、と仰せになり山といはず、川といはず、草木禽獸虫魚に至る迄無限の趣味を以て御覽になり、御自分と四圍の境遇とは全く一致合體して居られたのである、言葉を換へていへば宇宙の大我なるも

のと自己の小我と一如の境界にあらせられたのである以上予は三節に亘つて大體所感と述べ終つたのである。今回吾人旅行して山川草木殿堂伽藍悉く我が一行に何等か語らんとするもの、如く、又事實告げつゝあつたのであるが、智明を欠く此の不具者には不惑にも其真意を了解する事が出来ず只其辭句の一二を記したに過ぎないのである、尙付記すべき事は旅行中山川草木等について少からず感に打たれたにもかゝらば、殿堂に入つて比較的上人を追慕するの念が薄かつたのであるが此の事に就ては少しく意思もあると故他日を期する事として、今は只上人が此身延に於て我境一如、常在靈鷲山の心理的狀態であらせられた面影を極めてよく書き出された身延記の一節を掲げ筆を止むることにしよう。誠に身延山の栖霞はちはやふる神もめぐみをつたれ天下りましますらん心無きしづの男しづの女までも心を留めぬべし、哀れを催す秋の暮には草の庵に露深く擔にすだくさゝがにの糸玉を連き紅葉いつしか色深うしてたえゝに傳ふ懸桶の水に影を移せば名にしおる深山をびへて梢に一乗の果を結び下枝に鳴く蟬の音遊く前には湯々たる流水堪へて實相真如の月浮び

報 道

◎天晴會六月例会

第十七回例会は六月十一日午後四時九段階行社に於て開かれ、出席會員五十餘名、當日出席講演の予定なりし小笠原隆堂君は、宗門史料取調の爲め鎌倉地方旅行中にて出席相成り難き旨電報で通知せられたりとの旨幹事より報告せられ、左の講演に移る。

宗教的訓練

小林 一郎君

今日は専門家の小笠原君の講演があるので自分はほん少しして御免を蒙る考であつたが、今承れば欠席との事で甚だ困つた、然し自分を此に引張出し、講演せよと命ぜられたら本多大齋正であるから、斯う云ふ場合には大齋正は厭ふべき責任があると思ふ、私は日蓮主義の輪廓大御話をするから、中味は本多大齋正に入れて貰ふ積である、一體日蓮主義を説くには體用の二方面がある、日蓮主人は偉大である非凡であると思ふことは、用の方面に顯はれた事實である、此事實は法華經の信仰より出でたと云ふ體の方面を忘れてはならぬ、研究と批評とは違ふ、日蓮上人を研

無明深重の闇晴れて法性の空に雲もなしかゝる朝なれば庵の内には晝は終日一乗妙典の御法を論談し夜は竟夜要文誦持の聲のみす傳へ聞く釋尊の住み給ひけん鷲峰を我朝此砌に移し置きぬ。

終りに予が最も喜ばしく感じたことは、旅行中好天氣であつたこと、一行が和氣藹々の間に出で和氣藹々無事に旅行を告げたといふことである、一寸考れば何でもない様な事であるが其實大にさうでない、宗祖は異體同心なれば萬事を成し同體異心なれば諸事協ふ事なしとは吾人に對する嚴訓である、殷の紂王は七十萬騎であつたが周の武王の僅々八百騎の爲に散々に破られた、是軍兵は多いが同體異心であつたからである、日蓮が門下は人は少ないが異體同心だから權門の敵を打斃し、一定法華經を弘むることが出来ると仰せられたが、今吾人一行が少しでも面白くない旅行をしたとせんか如何なる史的材料を得て來よう、如何なる感想をもて來ようとは全く無意義の事となるからである、元來同窓が三人と寄合ば多少の不平議論を生じ、西とか東とかいふ事は極めて有り勝の事であるが、是が毛頭無つたのは確かに大上人の意義を假令少しなりとも體讀して居た者として予は衷心より悦だ次第である。(完)

突せんとするに一事一物其處に顯れた事實を取つて研究出来るが、批評せんとするには其全體を見て批評せなければならぬ、吾人は一部分の研究より進んで全體を見んと努力せねばならぬのであるとて、同氏特有の快辯を揮ふて縱横無盡に説き立てられ、五時四十分降壇、次で

日蓮主義と實生活

本多 日生君

の講演あり、小林文學士の希望により其中味を充實すべく登壇せられた、予は日蓮上人が各方面に活動せられた其原理を法華經に於て求めんと欲すとて、本經註刊に依つて一々立證しつゝ詳細に説述せられた、其説の大意は本誌六月號掲載の「國民生活と日蓮主義」と略同一である、講演終つて食堂に開かれた、例に依つて中々の賑ひである、松本幹事に左の新入會員を紹介する、新會員は一々起立して拍手を受ける、

第一義會幹事小西左平君、法學士小西眞雄君、實業家城所莊次郎君、陸軍少將小原正恒君、公吏福田學君、實業家宮島謙五郎君、海軍軍醫少監砂塚雅人君

關田幹事は天晴會夏季講習會の要件を報告せらる、「聽講者は男子に限るべしとの質問に對し、日蓮主義の鼓吹者たるべき婦人の來聴を

歡迎す」との答辭ありたり、尋で林將軍は起つて會員福田正の日蓮宗大學長就職の爲め祝意を表すとて一同と共に乾盃せられた、七時四十分食堂を閉ぢ、更に左の講演に移る

最近傳教衰頹の原因

脇田 淺洋君

維新前後傳教衰頹の原因は一言で言へば遺棄である、其を細別すれば、不學、無勇氣、不隨死地の三である、當時世間の志士なるものは學あり勇氣あり、度々死生の巻に出入して居るが、爾後には、そう云ふことはい、全々意氣地無し計りであつたとて一々其實例を引いて約五十分開例の大聲で論ぜられた、終つて閉會、時に八時四十分

◎六月の東京教界

第一義會 五日午後一時半修法の後左の講演ありたり

傳

井村 日成師

法華經の妙行

本多 大齋正

本會は日一日隆盛の域に向ひつゝありて、雨天なりしにも拘はらず滿堂の盛況なりし妙教壇人會 十六日定期より修法の後左の講演ありたり

我亦爲世父

石川 顯醫師

信念成佛

本多 大齋正

本月は如何なる天候の都合にや、會毎は雨天にて參集困難なりしも、熱心なる會員は風雨の爲めに尻込するもの一人もなく、益々勇猛心を發して參集せられたりは感歎の外なし、當日大正の講演は本誌に其全部を掲載せり、日蓮主義青年會 十九日例開會左の如き講演あり

日蓮上人の信仰 關田 養叔師
日蓮主義の向上自經 本多 大正正

當日は日本晴の天候にて暑氣甚しかりしも會員殆んど參集、其他普通の傍聴者數多ありて中々の盛會なりき、講演終つて後講師會員の懇談會あり何れも相當の智識ある青年なれば發する興の疑問中々に手強きものありて、談論風氣頗る果つべくとも見へざりしも薄暮の頃漸く散會を宣したり、將來有望の大會合なり

千葉縣監督布教

昨年の宗會に於て改正せられたる監督布教三部制度は本年一月三部監督布教師の任命を見四月本山大法會の際三部監督布教師の打合せ了し、直に布教開始すべかりしも、右教師の都合にて延期せられ本月に至りしが、最早年度終了の期日も切迫し居ることゝ、年度内

に是非一連の必要あれば其開始を宗務廳より命ぜられたれば、第二部監督布教師野口日主師は七月三日より同十一日迄千葉縣各教區巡錫せられたり、因に云ふ、第一部は本年十月第三部は本年八月中巡錫の豫定なりと云ふ、

教學財團基金申込報告

第二十六回

四十三年六月三十日迄分

特別會員

千葉縣上太田正立寺住職柳生肇叔 金七十五圓也 第二回申込通計一百圓也
千葉縣上太田正立寺住職柳生肇叔 金一百六十圓也 第三回申込通計三百廿圓也
東京市小石川本念寺住大須賀芝遊

贊助會員

千葉縣南今泉本泰寺檀家鈴木卯之松 金一圓
京都市久遠寺檀家 林 ラケ 金一圓 全
長谷川卯之遺 金一百二十圓
神奈川縣大戸本本榮寺檀家中 金三十圓
靜岡縣三島本妙寺檀家中 合計三百八十九圓也

教學財團基金受領報告

第三十四回

明治四十三年六月卅日迄分

千葉縣太田正立寺住職柳生肇叔 金二十圓(一)
東京淺草慶印寺内山櫻正枝 金二十一圓(定)
神奈川縣大戸本本榮寺檀家中 金二圓(四)
神戸市下山手通 井上 清吉 金四十圓(四)
全上方 井上せき、井上はな 金三十圓(二)
兵庫縣明石町圓乘寺檀家中 金二圓(一)
栃木縣乙畑本經寺檀家石塚丑造 金一圓(宛)
山田とみ、高沼きん、吹野なな 林嘉平治 山崎ちよ 五十錢宛 岡澤きく 岡澤治夫(皆) 四十錢宛 中村たけ 桑垣 金五 大多和りき 三十錢宛 高沼わか 吹野しん 岩崎よれ 太田みさ 岡澤時藏 全 林武七 長谷川よし 若菜くよ 全り 金 全とく 高賀まつ 三圓六十錢 中村三 真次 外十七名分合計(第二回)

千葉縣澁谷行光寺檀家

住職前田日教 二圓 中山金左衛門 八十錢宛 飛山伊右衛門 全五右衛門 全

福井縣南居妙正寺檀

住職前田日教 二圓 中山金左衛門 八十錢宛 飛山伊右衛門 全五右衛門 全

東京淺草寬受院寺檀

住職田島義潤 第三回) 五圓 古川 松藏 三圓 石川常之助 一圓宛 藤田金次 郎 柴田常次郎 鈴木善吉 池澤新吉 山崎 辰五郎 (第一回)

東京府品川本光寺寺檀

住職今成乾隨 十五圓 栗原政次 郎 十四圓 小瀬源太郎 九圓 網島榮太郎 四圓 藤田シゲ 三圓 江川吉五郎 二圓 毛塚金藏

會津妙法寺寄附金

領收廣告 (第四回)

第一回 圓能寺 寺田泰正 金四圓十四錢
第一回 第二區 廣部支通 金二圓也
第一回 第三區 善立寺 金一圓五十錢
全 井上日冲 金二十五錢
全 全 人 金五十錢
第一、二回全 大津賢淳 金二圓六十五錢
全 吉富敏叔 金一圓四十錢

平左衛門 全善右衛門 小竹園右衛門 全直 右衛門 全彦右衛門 横山與右衛門 全庄左 衛門 中村仙右衛門 六十錢宛 中山吉左衛 門 今吉平 飛山兵左衛門 全治右衛門 横 山利左衛門 小竹善左衛門 五十錢宛 小竹 與右衛門 全圓左衛門 全清左衛門 飛山平 右衛門 全七郎右衛門 全伴左衛門 全幸太 郎 横山竹次郎 全五其左衛門 中村仙吉 岩崎名三次 四十錢宛 小竹源左衛門 全仁 左衛門 飛山兵四郎 全伊四郎 南郷藤造 若山民右衛門 三十錢宛 横山利兵衛 全六 三郎全啓造 全興作 飛山利右衛門 全利八 全字太郎 全茂右衛門 全平作 小竹彌助 全野治郎 全平作 全友吉 西野興左衛門 中山泰吉 山本勘太夫 全勘太郎 全丈吉 若山與八 中村仙四郎 一圓八十錢 中山兵 右衛門 外十三名 (第四回)

京都市高辻久遠寺檀家

金二十五圓(定) 勝田甚吉 六圓(一) 井上 平吉 二圓(即) 林ラケ 一圓(即) 長谷川 卯之遺

千葉縣南今泉本泰寺

檀家 金六十錢宛 内山治太郎 全環 全左吉 八

山口縣久保村秋林寺

檀家

金十圓 河村勘藏 八圓 水本松二郎 四圓 宛 河村克次 全安之進 全和作 大木安十 三圓 河村捨藏 二圓六十錢 桑島敷之進 二圓宛 住職 吉田義掌 大木徳太郎 古 本勝之助 山下忠次 真木六松一圓 桑島健 藏 八十錢 大木代吉 四十錢宛 今地伊平 櫻崎久太郎 二圓七十六錢 桑島良助 外十 七名分(以上第三回) 金三圓(皆納) 河野峯

京都市榎木町妙滿寺門前

檀家 金一圓宛 吉澤嘉三郎 桑原秀次郎 高島甚 之助 宮崎力三郎 塚本儀助 鶴野田彦太郎

統一



第百八十六號

明治三十三年二月廿四日第三種郵便物認可
昭和十三年七月十五日發行第一號

(每月一回)

(東京 三島印刷株式會社印刷)